



お年玉

永代美知代

「お待ち遠様、どれ、これから幾らでもお手傳ひ致し  
ますよ。」  
 壽さんを寝つかせるので、お添乳をして被在つた母  
 様が、やつとこさでお床をぬけて、そつと茶の間へ出  
 て被入やると、父様はお一人で、算盤を弾いたり、帳  
 面を繰つたり、頻りと忙がしく、帳合の御整理をなす  
 つて被在いました。  
 「寝ついたかい、併しまた直ぐ眼を覺すんだと、結局  
 面倒だが。」  
 「ですからそつと、なるべく静かに致しませうねえ。」

「よし来た。え、願ひましては何十何圓何十錢也。何  
 圓何十何錢何厘也。」  
 斯様父様のお讀み上げなさる聲も小さく、母様がお  
 弾きになる算盤の音も、壽さんの寝て居る次ぎの部屋  
 を憚つて、お目々の覺めぬやうにとばかり注意される  
 のでありました。

「何十何圓何十何錢何厘也。何十何圓何十何錢——。」  
 「母さん。かあさんあん！」  
 「ソラ！」  
 父様も母様も困つたやうなお顔を見合せて、斯様仰  
 有いました。  
 「母さんてば、壽さんの母様てばよう！」  
 「何ですなえ壽さん、今日は大晦日ぢやありませんか、  
 忙がしいんですからねえ、母様は御用があるんだから  
 つて、先刻もさう云つて訓へたでせう。」  
 「えーだつても、そいだつても……」  
 壽さんは音無しい好い兒なのですけれど、一人つ兒  
 なものですから、今度とつてもう七つだのに、矢張り

母様と一緒にだつこでなくては、どうしても寝つかれ  
 ないのです。  
 「何十何圓何十何錢何厘也。」  
 「ようてば母さん、母さん母さん母さん！」  
 「黙つてらつしやい。」  
 「いやよ、いやよ。」  
 「不可ない！ さあもう少しだ、壽さんにかまはず、  
 ついでにやつつけよう。」  
 「何十何圓何十何錢何厘也。」

腹の中でこんなことを考へて居りました。  
 「もうそんな事云はないで寝んねなさい、お前あした  
 はお正月ぢやないの。」  
 「え？」 お正月！  
 壽さんはすっかり忘れて居たのでした。幾日も幾日  
 も、もう一月も前から一生懸命待つてた癖にして、  
 今夜の翌日が、散々待つたそのお正月とは知りません  
 でした。

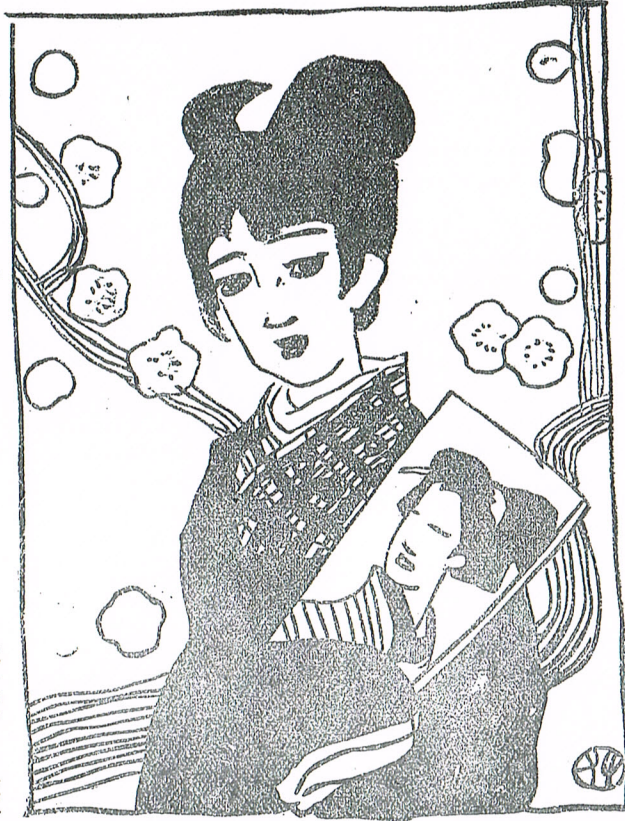
「いやよ、いやだつてば母さん、母さん。」  
 壽さんはいつもの通り、すぐにも母さんがお傍へ飛  
 んで来て、だつこして下さるに違ひないと思つて、散  
 散いや／＼を繰り返しますけれど、今夜に限つて、父  
 様も母様も知らん顔をして、お仕事をしてお被在います。  
 「何故だらう？ 母様てば随分だわ、こんなに私が泣  
 いてるのに、だつこもしないで、だれども大晦日つて、  
 そんなにいそがしいものなのかしら。」  
 壽さんはお口で、のべついや／＼を云ひながら、お

「え、え、お正月ですからねえ、大人にして黙つて一  
 人で寝んねなさい、壽さんは明日つから、もう七つに  
 なるんぢやありませんか。」  
 「だけれども大人しくしなげりや、いつまでも六つさ。」  
 父様は斯様仰有つて、  
 「どうだ壽さん、壽さんも餘り八釜しく云つてると、  
 お年玉をとり損なふよ。それでも好いかい。」  
 「いやよ父様。」  
 「ぢやあ音無しくしておいで。お年玉はね、音無しく  
 して居る人だけに、そつと授かるんだからねえ。」

「何時？　そして誰から授かるの。」  
斯様壽さんが訊きますと、父様は、

「歳徳様つてね、お座敷の床の間に三寶が飾つてあるだらう、その年の神様が、今夜夜中にお授けなさるのさ。だから壽さんも音無しくして居て、しつかりしゃんと頂かんけりやいけないよ」と仰有つて、

「さあ、よし、か、父様と母様と今暫らく御用をして居る間、壽さんは音無しくして寝ねしてゐるんだよ。」  
壽さんは床の間の三寶をじつと見据ゑて、いろんな



事を考へながら、もういや／＼も云はず、お鼻もならさず、一生懸命音無しくして居ます。

「え、願ひましては、何十何圓何十何錢何厘なり、何十何圓何十何錢何厘也。」  
父様のお聲が何處か遠い處から聞えて居るやうで、壽さんはしまひに眠くなつて來ましたが、どうかして目を覺して居やうと思つて、床の間の三寶を見据ゑる見据ゑしますけれど、知らないまに、歳徳様のお供の上の伊勢海老だの、お橙だのが、段々小さくなつて、向ふの方へ消えて行くやうな氣がしていきません。

「駄目だわ私、起きて居なくつちや、お年玉が來た時分授かれもしないんだもの、だけでもお年玉つてどんなものだらう、陀度丸いものに違ひないんだけど、もしかしてあの橙かも知れないわ。」  
壽さんがお腹の中で斯様思つた拍子に、床の間の橙が三寶からおつこちて、コロコロコロと壽さんのお寢床の方へ轉んで來ました。

「アラ！　お年玉！」  
壽さんは夢中で手を延ばして、轉がつて來た橙をしつかりつかんで、懐の中へ入れましたが、嬉しくつて嬉しくつて堪りません。

見れば見る程橙の色の美しいこと！  
「私今つから七つになつたのよ、だつても私歳徳様から、ちやんと立派なお年玉を授かつたんだもの。」

「オヤ、壽さんはおもう眼がさめましたの？」  
と、丁度壽さんのお正月のお着物を揃へて持つて被入つた母様は驚いて、目を丸くして被在います。  
「だつてお正月なんですもの。母様、ね、ちよつとこ

れ、お年玉よ、昨夜ね歳徳様から頂いたのよ、だつてね、コロコロコロコロと私の方へ轉がつて來たんですもの。」

「ホ、ホ、まあさう、よかつたのね、壽さんが餘り大人で、一人で寝ねしたもんだから、歳徳様が御褒美に下さつたのね。」

母様はニッコリ笑つて、壽さんのお頭をお撫でになりました。  
(↑完)